

本作の主人公の名をスギタ・コジヨウといつて実際文学者である。ヤングな頃は、それなりに名声を獲得し、二、三の作品はぶんと人気を獲得したこともあった。だがしかし、三十七歳の今日、こうして平凡マガジン社のサラリマンとなり、毎日毎日、社に通勤し、『平凡マガジン』の文章校正ロウドウまでして、アングラ文壇のホライゾンのさらにアンダーグラウンドへ沈没してしまうとは、スギタⅡサン自身も思っていなかっただろうし、彼のファンもそう思っていなかった。だがインガ・オホー、彼が今日のような零落してしまつたことには原因がある。スギタⅡサンは昔からそうなのだが、どうも若い女に憧れるというバッド癖がある。若い美しい女を見ると、普段はタツジン級に鋭い文士アイはすっかり威力を失つてしまう。ヤングの頃、シヨウジョ・ノベルを精力的に書いており、一時はぶいぶん少女や少女に憧れるビッグ・フレンズたちを魅了せしめたものだが、観察アイもイデオロギーもないロンギング・ラヴ・ノベル（あくがれ小説）がそういつまで、マッポーの世の読者人の関心を惹き付けられることができようか。ついにはこの男と少女ということが文壇シンジゲートの笑いシードとなつて、発表するノベルやありとあらゆるエクリチュールでさえも、しめやかな嘲笑の的となり、フートンに入るがごとく忘却されてしまつた。それに、その容貌が前にも言つたとおり、このうえもなくバーバリアンカラでスモトリめいているのでサツバツとしたアトモスフィアを生み出し、アバツ！あの

顔で、どうしてああだろう、一見するところでは、ゴイスーなデンジャーな猛獣とでもデユエルするとうような風貌と体格とを持っているのに……。これも「敵前のスモトリ、ドヒヨウ・リングを踏まず」という格言の体言であろうという評判であった。

ある時、友人間でスギタIIサンの話題があがった時、一人は言った。

「どうもワンダーだ。一種のイルネスかもしれないよ。先生のはただ、ロンギング・ラヴするとうばかりなのだからね。奥ゆかしいと思う、実際それだけなのだ。我々なら、そういう時には、すぐ本能寺リビドーがイレクタイルしてしまう。実際、ただロンギング・ラヴするくらいでは満足ができませんがね」

「ご安心ください、スギタIIサンは生物学的に、どこか不能なんじゃないかしらん」と言う者もいる。

「生物学的と言うよりも性癖フエキじゃないかしらん」

「いや、僕はそうは思わん。先生、ヤングな時分、ほしいままなエンジョイ&エキサイティングなことをしたんじゃないかと思うね」

「ほしいままとは？」

「言わずともわかるじゃないか……。あまりにもテクノブレイクしすぎたのさ。その悪習が長く続くと、生物学的に、実際あるオリエンテーションがロストしてしまって、フィ



後していることに相違ない。若い時、ああいうふうで、むやみにラヴ神聖論者を気どって、コトダマのでは美辞麗句を並べていても、本能寺リビドーを爆発四散させないから、つい自らをアカチャンめいて冒瀆し、チョウキモチイイ快楽を貪るといふようなことになる。そして、それがサラリマンの通勤スタイルめいた習慣になると、イルして、本能寺リビドーが充分の働きをできず、無理だコレになってしまう。スギタIIサンのはきつとそれだ。つまり、前にも言ったが、フィジカルとガイストとがウキヨエにペイントされたモチになってしまふんだよ。それにしても実際無視できぬ事例じゃないか。

ケンゼンを自負し、他人にもそれを勧めていた者が、今ではアンタイもアンタイ、デカダンのカリカチュアになってしまった。そうなるのもインガ・オホー、本能寺リビドーをないがしろにし、ケジメをつけなかつたからだ。君たちは僕が本能寺リビドー万能説を抱いているのをいつも批判し、自己反省を迫るけれど、実際、サイバネ技術が発展したところで本能寺リビドーはたいせつだよ。本能寺リビドーに従わん奴は生存しておられんさ」と饒舌に弁じた。

男達の話題はいつ果てることもなく、スギタIIサン of イメージを一方的に表象し、構築し続けていくのであつた。実際のスギタIIサンに正解を聞くわけでもなく。

トレインはヨヨギをハッシャオーライした。



例え汚染されたマッポーの世であっても、春のサンシャインは心地が好い。日がうらうらと照り渡ってはいるものの、空気は相変わらずよどんでいる。光化学スモッグで視界がさえぎられながらも、フジヤマのスゴイリッパな佇まいが霞んで見える遠景の下に大きなクヌギ・フォレストが立ち並び、センダ・リバーの窪地にシンチクのイッコダテが脈々と軒を連ねる窓越しの風景が、ソーマト・リコールのように早く過ぎ去ってしまう。けれどこの沈黙の住宅地よりも、美しい少女の姿の方が実心地好いので、スギタIIサンは眼前に相對した二人のムスメIIサンの顔と全身にロンギング・ラヴ・ソウルを集中させていた。

とはいえ、「非常に明るいボンボリの前はかえって見にくい」というコトワザにあるように、輝ぎのない住宅地風景を見るよりも、活きた少女を視察するのは困難なもので、あまりシツレイな態度で視察し、気づかれては申し訳ないという奥ゆかしさがスギタIIサンにはあるので、風景を見ているようなアトモスフィアで、スリケンが飛ぶように電撃的な早さで、流し目を少女たちに向かって鋭く送る。

かつて、あるアンブッシュのタツジンがこのような格言を残した——「トレインでレディを見るのに正面はシツレイ。かといって、あまりに離れた位地ではストーカーめいたアト

モスフィアが出て、周囲の人に怪しまれるデンジャーがある。しかし、正面から七〇度くらい斜にある位置に座り、奥ゆかしい流し目を繰り返してチラ見するのが実際ののしい」と。スギタIIサンは少女にロンギング・ラヴするのがイルネスであるほどだから、むろん、このくらいのアンブッシュ重点は人に教わるまでもなく、自然にその距離感を身に着けており、いつでもその楽しい機会をゲットして幸せです重点する瞬間を見誤らない。

年上とおぼしきムスメIIサンの眼の表情が、いかにカワイイヤッターなアトモスフィアであり、セーラー服——かのナカムラ・ヒロシが「天の羽衣」と呼んだ聖衣をまとうたら、天の星も、その天女のの前では爆発四散するであろうとスギタIIサンには思われた。耐酸性コットンで編みこまれた布地からすらりとした膝のあたりから、実際豪華そうな藤色めいたライト・パールの裾がチラリと見える。ホワイト・タビをの先が伸び上がったセッタ・サンダル。そしてなんとも性的な、色の白いカラーから、あのむっちりとバストが豊満に隆起するあたりが乳房おっぱいであるろうと、文壇アイで透視すると「フワオ♡」という妄想に刺戟された本能寺リビドーの暴走で、電脳が掻きむしられるような気がする。

もう一人の、フレッシユが豊満な方のムスメは懐からタブレット型端末を取り出し、画面をしきりにタップしはじめた。その様を視察していると、「センダ・リバーどすえ」——「トピラが開くどすえ」。車内に合成マイク音声のアナウンスが響き渡る。